

未来の地球のため 私たちができること

河川敷や道路、公園などの維持管理で発生する刈り草をエコ商品に開発し、環境啓発を行っている阿南光高校生徒などの活動「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」。高校生の取組が、資源循環型社会に向けて、人々の環境に対する意識改革を促している。そのうねりは、市内、県内はもとより、東京オリンピック・パラリンピックでの暑熱対策に、また東日本大震災への復興支援にまで広がりをみせている。青春の1ページに、学業に励む傍ら、環境活動を行う高校生の思いに触れた。

環境問題解決に向けた実践や啓発

緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクトチームは、阿南光高校、小松島西高校勝浦校、小松島高校、徳島北高校の高校生と各校を卒業した徳島大学、四国大学、徳島文理大学、県立農業大学校の学生、社会人の約80人のグループ。「考えよう未来の地球のために私たちができること」を活動テーマに、



もったいない2号に花の種を添えた「ミニ緑のカーテンセット」

地球温暖化防止に向けてさまざまな環境活動を行っている。活動の柱となるのが、河川敷や道路、公園などの維持管理で発生



徳島駅前での環境啓発活動

する刈り草を原料にした資源循環型肥料「もったいない2号」を作り、環境問題解決に向けた実践や啓発を行うこと。

もったいない2号は、徳島県立農林水産総合技術支援センターの成分分析で、土壌改良材として、土壌を柔らかくし、保水性や通気性に優れているなど、植物の生育

に必要な土壌環境の改善に効果が認められている。

ちょうど10年前の2010年。阿南光高校の前身となる新野高校の生徒が、学校の農園で育てた草花を地域に寄贈する「花いっぱい運動」を行う中で、河川敷などの除草で発生する刈り草の処分が苦慮していることを知った。毎年発生する刈り草は、県南部だけでも300トン以上。刈り草が有効活用されず、多額の経費をかけて植物廃材として焼却処分され、二酸化炭素を排出している。

この問題を解決するため、生徒たちとともにチームの顧問となる



リサイクル施設で刈り草から堆肥を作るメンバー

当時同校教諭の湯浅正浩さんは、刈り草を堆肥として再利用することを発案。生徒たちは、刈り草を発酵・分解させる微生物を探すため、さまざまな場所の落ち葉を試したり、米ぬかを加えたりするなど、改良に改良を重ね、3年かけて2013

もったいない2号を環境教材に

チームの高校生たちは、できあがったもったいない2号にアサガオやヒマワリの種を添えた「ミニ緑のカーテンセット」を環境教材として製作。市内や徳島駅前などで配布し、環境啓発を呼び掛けた。また、プロ野球独立リーグの徳島インディゴソックスと連携して、J A アグリあなんスタジアムでの試合開催時に配布した。

活動を発展させ、徳島県や阿南市などの行政と連携し、徳島県南



花いっぱい運動

部健康運動公園内にある、リサイクル施設を刈り草堆肥の製造場所として事業化。年間に約6トンの堆肥を生産している。

また、全国で初めて高校生の環境活動から地域の雇用も創出し、持続可能な取組として先導的な事例となっている。

2017年からは、パッションフルーツが持つ「糖尿病予防」の成分に着目し、徳島県の健康課題を解決する取組として、もったいない2号を活用した、緑のカーテンづくりの出前授業などを実施。

チームによる環境出前授業、ワークショップは全国各地で今までに50回近く開催し、取組を紹介して



環境出前授業で取組を紹介する



メッセージカードに思いをしたためる

同校1年生の北井 希さん、高原美月さん、立石友莉亜さんは、「私たちにしかできない支援を考えたい」と思いを語る。

「学校を卒業して社会では、人は総合力が試される。活動で得た知識や経験を生かして、地域の中心となり、よりよい社会を築いてほしい」とエールを送る。



チーム顧問の湯浅正浩さん

顧問の阿南光高校教諭湯浅さんは、「生徒たちは、活動を通して、一人ひとりが自ら考え、行動することを学んでいる」と語る。



緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクトチーム 阿南光高校のメンバー

プロジェクトが始まったきっかけとなった花いっぱい運動は、1992年に新野高校が甲子園に初出場した際に、応援してくれた方々へのお礼で、地域に花を寄贈することから始まった。

阿南の地より 世界に向けて光を生む

高校生の活動は、私たちに環境を考えるきっかけを提供し、意識を変える行動変容へと導く。環境問題や地域課題は、一人では解決することができない。だが、みんなの行動で社会は変わる。



もったいない2号に添えられるメッセージカード



東京ビッグサイトに展示されている移動式緑化ベンチ

被災地に寄り添った 復興支援を

2018年、環境問題の解決に取り組む団体や若者を表彰する「第8回毎日地球未来賞」の奨励賞を受賞した際、会場と同じく受賞したNPO法人「桜ライン311」から声を掛けられた。もったいない2号を植樹する桜の苗木の用土として使いたいというのだ。

これまでの堆肥を送り支援する活動に加えて、生徒などの思いを記入したメッセージカードをもったいない2号に添えて送るのだ。阿南光高校全生徒や、広く県民に作成を募る。メッセージカードは、陸前高田市の復興商店街に展示していただけると、快諾された。



もったいない2号を袋詰めするメンバー

総合研究センターによって考案された、東京オリンピック・パラリンピックの競技会場周辺に設置される「移動式緑化ベンチ」の用土として採用され、大会の暑熱対策に一役買う。

今年、生徒から発言があった。来年3月11日は、震災10年の節目に当たることから、復興支援のため、私たちに何ができるのか話し合いたいという。



陸前高田市の津波の到達地点で、桜の植樹に参加

チームはもったいない2号を通じた活動のほか、那賀町木頭地区での「山櫻プロジェクト」と連携した里山保全活動や徳島県勝浦町での町おこし活動、美波町志和岐地区で県内唯一の自生地である絶滅危惧植物ナミキソウの保全活動を実施するなど、学校や地域を超えたさまざまな活動へと展開している。